

# 大学出版 '96 春

No. 29



大学と社会を結ぶ  
知のネットワーク

The Association of  
Japanese University Presses

大学出版部協会



大学出版  
29号

Spring · 1996

読書の周辺	マルクスと知らぬが仏	福留 久大	1
—— バッケンとバックの間			
読書の周辺	読書と映像	今 防人	6
—— CD-ROM 社会学教科書の構想のために			
文字組版と電子化・標準化	植村 八潮	11	
第17回（一九九五年度）日本生命財団出版助成図書			14
歩く・見る・聞く—— 知のネットワーク	3		16
大学出版部ニュース			18
新刊案内'96・1、'96・3			26
製作の現場から	14 A		表 3

## マルクスと知らぬが仏

——バッケンとバックの間

福留 久大

\*\*\*二十年ぶりの友の哄笑\*\*\*

一九八六年の春のこと、アセアン諸国の調査の途中、シ  
ンガポールで小松製作所の現地法人に駐在していた大学時  
代の旧友、照田勇二の家に寄った。食事の後、「君は、大分  
長い間『資本論』を読んでいるらしいけど、何か発見した  
かね」と尋ねられて、困ってしまった。諸先輩によって深  
められた『資本論』研究の見地によって、『資本論』の内容  
を読み通せるようになりつつあったが、自ら開発した創見  
となると、はつきり形に示せるものには思い至らない。

結局のところ、照田に示したのは、その旅でバンコック  
のタマサート大学やクアラルンプールのマラヤ大学で友人  
たちに披露した『資本論』を巡る次の挿話だった。マルク  
スの原文で Backen「頬」となっている部分が、エンゲルス  
監修で一八八七年に刊行された英語版で back「背」に誤訳  
されたまま、英語版三種類、日本語版五種類に今も残って  
いるということ。照田は途端に笑いだし「なんだお前、小  
さいことをやってるんだな」と言う。「笑うなよ。ともかく

これに気付いたのは俺より前には誰もいないはずなんだ。  
世界で最初の発見には違いないよ。家の茶の間でこれに気  
付いたときにはつい女房に知らせる声も震えてしまったほ  
どの驚きだったんだ」。そう抗弁する私に対して、旧友の  
「わっはっは」の哄笑はさらに大きくなるだけだった。

\*\*\*大古典に関する小発見\*\*\*

『資本論』という大きな書を巡る私の小さな「発見」  
が生まれたのは、一九七九年三月下旬だった。労働力の商  
品化、賃銀労働の一般化を軸にして近代資本制社会を把握  
するマルクスの経済学がどのように形成されてきたのか。  
『資本論』第一巻第二章「いわゆる本源的蓄積」を中心  
に、マルクスの議論と彼が依拠した文献を比較検討する。  
その関心から当時読んでいたのがイーデン『貧民の状態、  
或いはイングランド労働階級の歴史……』全三巻だった。

(F. M. Eden, *The State of the Poor, or An History of  
the Labouring Class in England, ……*, London, 1797).

ヘンリー八世やエドワード六世の時代に進んだあたりで読んだ覚えのある文章に幾つも出会う。しかし『貧民の状態』を読むのは、その時が最初だった。どこまで読んだか、思い巡らして、『資本論』第一巻第二四章「いわゆる本源的蓄積」第三節「一五世紀以後の被収奪者に対する血の立法、労働賃銀引下のための諸法律」に思い至った。邦訳文庫版の『資本論』と照合してみると、確かによく似た文章が並んでいる。興味が増して念入りに突き合わせてみた。「エドワード六世、治世第一年、一五四七年の「法規」を読み比べて、私は「え」と驚きの声をあげた。驚いた事情を述べる前に、①『貧民の状態』の原文、②『資本論』の邦訳、③その原文の該当箇所を列記してみよう。

① if he runs away from his master for the space of 14 days, he shall become his slave for life, after being branded on the forehead, or cheek, with the letter S; and if he runs away a second time, and shall be convicted thereof by two sufficient witnesses, he shall be taken as a felon, and suffer paines of death, as other felons ought to do. (vol. 1, p. 101)

② 奴隷は「一四日間仕事を離れれば終身奴隷の宣告を受けて、額か背にS字を焼きつけられ、逃亡三回目には国にたいする反逆者として死刑に処される。(岡崎次郎訳、国文庫版、第三分冊、三九三頁。)

③ Wenn sich der Sklave für 14 Tage entfernt, ist er

zur Sklaverei auf Lebenszeit verurteilt und soll auf Stirn oder Backen mit dem Buchstaben S gebrandmarkt, wenn er zum drittenmal fortläuft, als Staatsverräter

hingerichtet werden. (K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, 1867, *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 23, 1962, S. 763)

「え」と驚きの声をあげた第一段階では、烙印の場所を「イーデンは」on the forehead or cheek「額か頬に」としているのを、マルクスが「額か背に」と誤訳したと思っただ。本当は auf Stirn oder Backen「額か頬に」と、マルクスは正しくドイツ語に翻訳していたのである。Rücken「背」と誤訳したわけではない。だが、しかし『資本論』を読むと言っても、通常は翻訳に頼っていた私は、邦訳版の「額か背に」に馴染みが出来てしまっていて、原書を開いても auf Stirn oder Backen を「額か背に」と読み流して、それが誤訳びもどかとは思ひもしなかったのである。

改めて auf Stirn oder Backen を一語一語ドイツ語辞典に当たってみた第二段階で、マルクスは「額か頬に」と正訳したことが、邦訳者たちが「額か背に」と誤訳したことを知るに至ったのである。(一)最初の完訳、一九二一年刊行の高島素之訳「額なり背なりにS字を烙印される。」(二)長谷部文雄訳「額または背にSの字を烙印され、」(三)向坂逸郎訳「額か背に、S字を烙印され」(四)岡崎次郎訳、前出。(五)宮川實訳「額または背にSという字を焼きつけられ」。五種類悉くが、誤訳を犯してゐる。

第三段階に至って、マルクスが誤訳を犯したのは「逃亡三回目」*Wenn er zum drittenmal fortläuft* 部分であるに分かる。イーデンの原文は「逃亡二回目」*if he runs away a second time* である。「ハイムロー六世治世第一年、一五四七年の「法規」そのものは「もしその奴隷が二回目に逃亡すれば」*if suche Slave shall the Secondyme runne away* (*The Statute of the Realm*, Vol. 4) である。確かに「三回目」はマルクスの誤訳である。

### \*\*\*学校英語の強い影響力\*\*\*

日本の訳者が揃って *Backen* を「背」と誤訳したについては、英語の影響を考慮せざるをえない。一八八六年生れの高島素之は群馬県立前橋中学を経て同志社に学ぶ。一八九七年生れの長谷部文雄は愛媛県立今治中学から第一高等学校へ、同年生れの向坂逸郎は福岡県立八女中学から第五高等学校へ、一九〇四年生れの岡崎次郎は、愛知県立第一中学・大阪府立天王寺中学から第一高等学校へ、一八九六年生れの宮川實は山口県立山口中学から第一高等学校へ。その旧制中学から高校にかけて、彼らは外国語としてまず英語を学んでいる。ドイツ語は後発の外国語であり、通例では第二外国語である。学校英語の強い影響力は、訳者たちを英語版『資本論』の参照へ誘い、さらにそれへの依存を生むことになった。ここで決定的な力を及ぼしたのが、エンゲルス監修で一八八七年に刊行された英語版である。

If the slave is absent a fortnight, he is condemned to slavery for life and is to be branded on forehead or back with the letter S.

(translated by Samuel Moore & Edward Aveling)

ドイツ語 *Backen* 「頬」が英語 *back* 「背」に錯覚され誤訳されている。原書より先行翻訳書に頼るのは、日本だけではない。一九二八年エブリンズ文庫刊行の Paul 夫妻訳の英語版も、一九七六年ペンギン文庫刊行の Fawkes 訳の英語版も、*on forehead or back* の誤訳を踏襲している。

### \*\*趣味のと仕事上の文章\*\*

一九七九年のこの小発見以来、『資本論』の各国版やマルクスの参照文献を読むこと、原著者マルクスとの関係を文章に綴ることが一九八〇年代前半の私の趣味と化した。「英訳『資本論』の原書」「邦訳『資本論』の原書」(評論・七九年七月、八月)、「マルクスは頬と訳した」「マルクスと典獄と医師」(社会科学の方法・七九年十月、八一年七月)、「マルクスの入ったパプ」(経済評論・八一年七月)、「前頁で留ったマルクス」「大小を違えたマルクス」「マルクスと植字工の間」「マルクスとジョンソン」「フランクリンを挟んで」(UP・八〇年九月、八一年三月、九月、八六年十月)、「マルクス残虐立法論の源泉——イーデン『貧民の状態』」「マルクスの農業機械論」「How Marx Has Been [Translated?]' (九州大学経済学研究所・四四卷四一六

合併号・七九年、四五巻四一六合併号・八〇年、四八巻三  
—四合併号・八三年）等々がその例。

「額か頬に」に限って言えば、それらの文章で、次のこ  
とを明らかにし得た。(1)前記英訳版と邦訳版の外に、中国  
語版に「在額上或背上」(on forehead or back)の誤訳。(2)  
ポルトガル語版に「na testa e nas costas」(in the  
forehead and in the back)と二重誤訳。(3)フランス語版に  
「sur la joue et le front」(on the cheek and the  
forehead)と正誤半々。(4)ロシア、ポーランド、チェコ、セ  
ルボ・クロアチア、ハンガリー、スペイン、イタリア、オ  
ランダ語版では、「額か頬に」と正訳。地理的歴史的に英語  
への対抗力の強い地域に正訳が多いと言えよう。

一九八〇年代後半になると、趣味的文章の執筆は間遠に  
なっていた。雑誌「すくらむ」(当時「すくらむ社」現在  
・青年問題研究所発行)に「マルクス経済学の初歩」の連  
載を求められて、第一回「マルクスとコロンプス」(八五年  
一月)から第三二回「資本制と労働制の岐路」(八九年五  
月)まで、「資本制社会の機構と運動を概観できるもの」を  
書くために『資本論』を今目的水準に立って読み解く「経  
済学の仕事上の文章に主力が移ったからである。一九九〇  
年代前半は、教養部改組・大学院創設のための仕事上の文  
章と、「マルクス経済学の初歩」の連載を著書に纏める仕  
事上の文章とに追われて、趣味的文章の執筆の余裕が得ら  
れなかった。一九八九年の北欧の旅で、デンマーク、フィ

ンランド、スウェーデン、ノルウェー語版が増えたけれど、  
まだ点検できないままである。幸い改組のための文章を書  
く仕事からは九三年で自由になった。連載は加筆添削の上  
で九五年十月に『資本と労働の経済理論』(九州大学出版  
会)として著書の形を成した。趣味的文章を執筆する余裕  
が生れて、その一つの現れがこの文章である。

### \*\*\*「額か頬に」の後日談\*\*\*

「額か頬に」を巡る趣味的文章に対して(英国) Moore  
& Aveling 訳の英語版を刊行している Lawrence & Wis-  
hart Ltd. から応答があった。——Thank you for your  
letter pointing out the regrettable error in Samuel  
Moore's translation of Volume I of *Capital*. We shall  
endeavour to correct it at the earliest opportunity.

しかし、現実の訂正作業は未だのようである。それに對  
して日本では資本論翻訳委員会訳『資本論』第四分冊(新  
日本出版社、一九八三年五月刊)一二五九頁に「額か頬に  
S字の烙印を押され」と、遂に正訳が現れた。但し、拙文  
が何らかの作用を果たしたか否かは知り得ない。

韓国では『資本論』は長らく国禁の書であった。一九八  
八年のソウル・オリンピックを迎える準備過程で、八七年  
に김영민訳が、次いで八九年に金秀行訳が、刊行された。  
該当箇所を見ると、前者では「이마(イマ・額)와(ワ・  
と)등(トゥン・背)에(エ・に)」(on forehead and

back)で、誤訳は「と」と「背」の二個である。後者では「이마(イマ・額)나(ナ・か)등(トゥン・背)에(エ・2)」(on forehead or back)で、誤訳は「背」一個である。

三鷹市下連雀にある木造の井之頭寮で、冒頭の照田勇二が寮委員長、私が会計委員をしていた一九六三年の頃、玄関脇の黒板に、時折即興漢詩を掲げる白面の青年がいた。一九九三年九月下旬、台湾訪問の団体に入ると、その池田知久と一緒にあった。今は、東京大学で中国思想史を講じている由。九月二十六日、彼に連れられて行った重慶南路の書店で、台北版の『資本論』を購入できた。一九九〇年刊の呉家駟訳である。問題の箇所を一瞥、烙印を押す場所は「並在額頭或臉頰」(on forehead or cheek)と正しく訳されている。前記のように一九五三年刊の郭大力・王亜南訳の北京版が「在額上或背上」(on forehead or back)と誤っているのと対照的である。

### \*\*\*十五年間の知らぬが仏\*\*\*

台北版『資本論』を購入できたのは、池田知久のおかげだった。それからほぼ一年の後、その台北版の縁で、北九州市教育委員長・池田弘に「教育」される恩恵に与ることになった。東京大学経済学部同窓会・経友会の福岡支部の世話人、有吉恭徳は、一方で私の大先輩であり、他方で社会人大学院生として私の指導学生である。この先輩兼学

生に同窓会での五分間卓話を求められた。一九九四年十月十二日、マルクス研究の盛んなはずの北京の版に誤訳が生き続け、マルクス研究に反親和的とみられる台北の版に正訳が見られる事を話した。

その途中で、私は「額」foreheadを、フォアヘッドと発音した。これまで、イギリスでも、ドイツでも、スウェーデンでも、タイでも、そして日本のあちこちでも、この挿話を紹介する時、そうしてきた通りに、フォアヘッドと。

この会合で初めて会った池田弘から、数日後一通の手紙が届いた。会合で配布したハングルの『資本論』の該当箇所「丁寧な読みと邦訳とが書き加えられて、さらに次のような「教育的指導」が施されていた。フォアヘッドと発音されたように覚えていますが、フォリッドが正しい発音ではないでしょうか。辞書で確かめるより早く、脇から覗き込んでいた妻がクスクス笑い出した。あなた、フォリッドと発音するのを知らなかつたのですか、私、高校生の時、教わりましたよ、と。続けて、高校一年の末娘も、「お父さん、恥ずかしいよ、フォアヘッドなんて発音して」。

十五年間、私は、フォアヘッドと言いつつ続けてきたのだ。人様が、ドイツ語バックンを英語バックに錯覚し誤訳した事を吹聴しながら。全くのところ、絵に描いたような知らぬが仏だったことになる。(一九九六・一・二十五)

(九州大学経済学部教授)

## 読書と映像

—CD-ROM 社会学教科書の構想のために

今 防 人

一、はじめに

数年前からパソコンを使用し始めた。周辺を見ると使用している自分より年上の同僚もいるにはいるがやはり、かつて自分もそうだったように拒否反応を示す人もいる。一本の線を引くならば五十代半ばであろう、社会学の分野でいうならば計量的な手法の先駆者の教えを受けた人々が大体この年齢から下と記憶している。

しかし、筆者が大学院でフォートランの手ほどきを受けた頃とは全く異なっているのには驚かされた。カードにパンチを入れた頃とはまさに雲泥の差がある。ワープロソフト一つ取ってみてもローマ字もしくはカナの入力にしても本当に便利になったものと思う。また、ハード、ソフトにしても余りにも進歩が激しくて果たしてどの位の人が付いて行けるかとの危惧を抱かざるを得ない。一つのソフトにしてもヴァージョンアップが次々と行なわれ前のヴァージョンをマスターしない内にもう次の物が出る。正しくイタチごっここの観がある。

ある調査によるとコンピュータの専門家でも六割近くが自分が技術の進歩について行けるか不安だと感じていると言う。また、情報関係の研究所の技術者も三十代、四十代で肩叩きが始まると言われている。

世に挙げてマルチメディア時代と喧伝している。一般にはかつてのニューメディアの再来かと冷やかに見る向きもあった。しかし、パソコン通信のみならずインターネット加入者の急増、そしてその商業化だけを取ってみても、今後各方面にはかり知れない影響を及ぼすのは必至と見た方が良いかもしれない。

このエッセイは一大学で社会学概論を講ずる教員として従来の社会学教科書に替わるものとして映像・音声を駆使した教科書を考えられないものか、そしてまた、そのような変化を支える裏付け、その変化の意味をいささか考えるものである。もとより、筆者は情報の専門家でもオタクでもないから上記の多種多様な変化をウォッチしてその社会的な意味を考究するものでもない。現段階ではコン



ピュータを駆使すれば新しい研究成果や新しい発想が自動的に出るというものではない。

## 二、映像・音声を取り入れた論文の可能性

これまで卒業論文を数多く見たが映像や音声を使用する論文を書いたり、書きたいという学生に会ったことが無いのはまことに残念である。

映画誕生から昨年で一〇〇年、日本で一般にテレビが普及し始めてから数十年経過している。この間ビデオの登場、無数のゲームの出現、そして「モニター世代」なる言葉まで出てきたが大学での教科書や卒業論文、修士論文に映像・音声を利用する段となると抵抗を示す教員が多いのも事実である。一般社会における映像の普及がこれほど見られるのになぜこのような拒否反応が見られるのであろうか？

言うまでもなく文字に比べると音声はもちろん、映像とりわけ動画がいかに多くの情報を伝達するかを一枚のCD-ROMが入力可能な文字と動画を比べてみれば一目瞭然であろう。こうした拒否反応は根深いものだと思う。

ひとつには日本における映像の一般的な地位が挙げられる。最近ではホームビデオの普及によりさまざまな作品を作る人々が増えているのも事実である。そうした作品がしばしばテレビで紹介される。なかなか愛らしい作品や珍しい現象を扱ったものも散見される。しかし、その多くは記

念写真をビデオに置き換えたものが多いようだ。多いのは愛児の成長を撮ったものであろう。

猪瀬直樹氏の指摘だと思うが肖像画には一つの定型があるように家族の記念写真にも定型がある。ある一定の枠の中に入れてこそ記念写真になるのだ。枠の欄外にあるマージナルな作品が優れた作品となるのかもしれない。

さらに風景を扱った作品にしてもある種の定型化が見られる。

そもそも「風景」自身が自然そのものがこの国においては明治以前においてはほとんど定型化していたことは山水画の例を引くまでもない。近代に入りヨーロッパから自然主義がさまざまな分野に導入され一部の分野では欧米に匹敵するような業績を生み出してきた。しかし、定型を重視する傾向は衰えなかった。この傾向は民衆のレベルではむしろ定数となっていた。

定型そのものを打破することは容易なことではなかった。

## 三、映像の享受と創造—日本人の映像観

ある映像人類学者が語っているところでは日本では一〇〇人中九九人までが映像を創ろうとはせずにもっぱら享受の対象と考えている。これがヨーロッパ、とりわけフランスとは決定的に異なるそうである。フランスでは小学生の頃から美術館巡りをして自分がそこから何を感じ見るのか

をトレーニングされている。多くの場合、静物から肖像画まで定型化が図られている日本とはやはり異なっているの  
だろう。

日本ではビデオと言えば一般には先ほどの例ぐらいの  
〈創造〉しか見られない。この人類学者が所属機関で映像  
制作の教室を開いたところ最初集まった約五〇人ぐらいの  
受講生は一、二カ月もすると一人も残らなかったという。  
彼の解釈ではテレビの有り様にも一つの大きな原因がある  
という。フランスではそもそも放送時間が日本に比べると  
極めて短い、さらにいわゆるお笑い番組が少ない。

俗悪番組をここで批判する気はないが若い人が四六時中  
お笑い番組を見て大笑しているのには時代劇などを見てい  
る我が身を省みず複雑に気持ちになるのも偽れない点であ  
る。

需要があるから提供するというマスコミの論理をここで  
は問題にはしない。しかし、かつての活字中心の時代とは  
異なりテレビは年齢の区分を超えた視聴者を集める。ビー  
トタケンやタモリなどが登場するバラエティ番組はおよ  
そ年齢の区分の超えているのは経験的にも明らかである  
う。

単にビデオ機器の発達が映像教育を保証することではな  
いことは以上でわかるであろう。我々は日本文化の底に潜  
むパターンに注意を払う必要がある。

さらにヨリ根本的には文字そのものの階級性が挙げられ

るかもしれない。特権的な階級の専有物だった文字が近代  
社会になって民衆に開放されたのは疑い得ない事実だっ  
た。しかし、識字能力が付いたからといって文字の自由な  
マニピュレーション（操作）に対する抵抗力が保証され  
ることにはならない。

一昔前の教育を受けた人には文字の呪術的な支配を未だ  
に脱しきれていないとつくづく思い知られることがたび  
たびある。修士論文でもしばしば強調されることは「文章  
力」である。「あの論文は内容はまずまずだが文章力がな  
い」という批評をよく聞くことがある。これは一種の美学  
ではなからうか。さらには文字の呪術性が潜んでならない  
ような気がする。

漢字文化圏に属するこの国においてはこの傾向は未だに  
充分根を張っていると思われる。構造主義が流行した時言  
語学の入門書をひもといた時「言葉」というとしばらくは  
どうしても「書き言葉」を即時に連想して「話し言葉」が  
出てこなかったことを思い出す。

しかし、良く知られたことだが「書き言葉」を持たなく  
ても話し言葉を持たない民族、部族はいない。「話し言葉」  
の方がよりプリミティブだと言えるだろう。したがって、  
音声により広く享受者を対象としていると考えて差し支え  
ないであろう。もっとも、それだけに話し言葉には訴える  
力が書き言葉よりも有ることはナチスなどによって十分証  
明されたと考えてもよいだろう。

#### 四、大学教育における映像の可能性

##### ——マルチメディア教科書

大学教育の現場での映像の導入は外国語を中心にそれなりに展開してきていると思われるが、社会学教科書での利用は思ったほど進んでいないようだ。

一般に辞書、百科事典などのCD-ROM版は一般家庭でも徐々に普及し始めている。しかし、その場合でも静止画や限られた音声の付加に止まっている。

しかし、情報社会化が日本より一歩進んでいる米国では日本のCD-ROM百科事典とはひと味異なるものが発売されてベストセラーとなっている。たとえば、マイククロフト社から出ているCD-ROM版百科事典は、視覚・聴覚から見ると非常に良く出来ている。この百科事典の特徴は動画と音声をふんだんに活用していることである。一例を挙げるとBill Clintonと引くとクリントン大統領が演説をしたり、サキソフンを吹いたりする。百科事典としては決して本格的なものとは言えないかもしれない。しかし、映像・音声を多く利用した百科事典として一般の読者を対象としたマルチメディア版として廉価な点もあって広範囲な読者を獲得している。前述の様にクリントン大統領を文字で説明するよりもはるかに分かりやすいのは論を待たないだろう。駝鳥を引くとカラーの駝鳥の動画が何秒か走るのである。駝鳥を全く知らない人にその形や走り方を説明するためにはどれだけの文字が必要かを考えればこの場

合の映像の価値は極めて大きいことは納得できるだろう。

これを社会学の教科書に応用できないかというのが最近の小生の夢である。もちろん、映像を利用したさまざまな社会学の教材としてのビデオが販売されていることはそれなりに知られている。しかし、ビデオで見る社会学教科書は数年前に出ているが、これは自分でビデオを探して（もちろん、ビデオ店で借りられるポピュラーなものがほとんどであるから不便とは言えないが）見るものである。CD-ROM版のものはいまだ出ていないようである。

#### 五、映像・音声を利用した社会学教科書の可能性

一、既に述べたところから分かるように映像・音声の効果は抜群であろう。例えば、「群集」「モップ」といってもデモ一つ見られない当今では音声入りの動画は社会学上の重要な現象を視覚と（ある程度の）聴覚に訴えて理解させることが出来るだろう。あるいは社会学史上の人物についても生誕地や学んだ大学さらには当時の政治、経済、世相、風俗など彼らの理論・考えを取り巻く環境・状況を極めて理解しやすくするだろう。例えば社会学の始祖であるオーギュスト・コントを扱うにしてもフランス革命についての映像（既存の無数の映画の映像を利用できよう）絵画そして彼が学んだエコール・ポリテクニークのキャンパス、彼が投身自殺を試み将校に助けられたセーヌ河の橋などの映像はコントという人物をヨリ身近な存在とするであ

ろう。あるいは社会心理学的な小集団の実験も映像・音声を使用することで理解を早く・深くすることが出来る。

また社会学はこれまでも「現代の学」あるいは「アラモードの学」であると言われている。従って、社会学者いわば二四時間自分も含む状況を対象とする調査のフィールドに居ると言って差し支えない。しかし、シグサの研究が明らかにするように自分を含む状況とはなかなか分かりにくい。日常生活、しかも地球大に広がる日常生活を社会学する際には実際に自分でカメラを回すことによってこの日常生活を説明することに大いに役に立つだろう。

この教科書を参考にして、あるテーマに即した社会現象を対象とした映像・音声を使った作品を創ることも決して不可能なことではない。これによって自分が生きている社会をヨリ客観的に第三者の目で把握出来るかもしれない。もちろん、このためには映像制作の基礎が出来ていなければならないし、そのための準備も必要だ。上記の映像人類学者はまず第一にカメラを持つ姿勢から始めなければならないと指摘しているくらい基礎を創らなければならない。

ここ数十年、記号論の流行は社会学でも解釈学は盛況を極めている。しかし、映像社会学の分野ではこれからは実際の制作により社会現象を切り取り、それにより社会現象の明確な提示と解釈が可能となるだろう。

機器ソフトの発達、インターネットの展開により、映像を自由に取り込むことが可能となりつつある現在、状況は

社会学者の守備範囲を拡大なものにしつつあるようだ。遡ることなく進むべきであろう。

二、映像・音声は今後ますます保護されるようになるであろう。その際に当然問題になるのは著作権の問題であろう。写真でもものによってはかなり高価なものが多数ある。著作権料の問題をいかにクリアするかが重要となるだろう。

三、本稿では主として映像・音声の重要性を中心的テーマとしてきたが文字を無視する事でないことは言うまでもない。文字は人間の最大の発明といっても差し支えない。また、人間の思考の根本である。文字に対する極端な批判と一方的な映像・音声賛美は何も生まないし逆に思考の鈍化を生むかもしれない。映像や音声は勝れて情動に訴え易いから理性的なアプローチを困難にする場合もあるからだ。問題は、これからは文字・映像・音声を組み合わせた社会学的な研究を進展させなくてはならないというのが筆者の主張である。

(流通経済大学社会学部教授)

# 文字組版と電子化・標準化

植村 八潮

昨年度の大学出版部協会編集部会主催の「編集者の集い」において、JISで新たな標準化や改正作業が進んでいる文字コードや行組版規則についての講演会を開催した。本来工業規格であるJISで、出版に関する規則が決められていることの経緯や問題点について整理してみた。

## ■文字組版の環境変化

「活字文化」という言葉があるように、つい最近まで文字組版は活字を並べて組版していた。現在の印刷物全体の中で活字組版が占める割合は、ごくわずかだが、今でも一般の人の印刷に対する認識は活字ではないだろうか。カラー印刷や大量の印刷物が作られるようになって、オフセット印刷が台頭し、活字から写真植字に代わり、さらに電算植字というコンピュータを利用した組版が発達してきた。文字組版の歴史は古いが、技術が安定したのは昭和三十年代後半から四十年代前半である。仮に組版の流れを図1のように表すと、現在は、まもなくDTP全盛期を迎える時期といえる。活字組版からDTPまでの流れは、文字組版の一般化といえる。つまり文字版下製作が組版のプロの世界から誰でもできる世界へ移ってきた歴史でもある。

もう一つの流れの見方は、文字組版が「印刷・出版産業の一部」として開発されていた時代から、「日本語情報処理産業の基礎」として位置づけられる時代への変化である。一九七八年、漢字が文字コードとして最初に定義(JISC 6226)された当時は、漢字をコンピュータで処理することは印刷業界の一部で取り組まれていただけである。その後二十年も経たないうちに私たちのまわりにはコンピュータがあふれ、膨大な量の日本語データベースが生まれ、ネットワークを通じて文字データがやりとりされている。

今や完全に主従の関係が逆転し、印刷における文字組版は日本語情報処理の一部にしか過ぎない。膨大な予算が動く、そして、世界に開かれている情報産業の主導で文字データの取り扱いが決められているのである。

## ■情報交換用漢字符号(JIS X 0208)

いわゆる文字コードは一九七八年に最初に制定され、三年に二次改正、九〇年に三次改正が行われている。

まもなく制定される四次改正では、JISで規定されている文字の出典を明らかにする作業に多くの時間が費やされたという。現行、六三三五五のうちの「新字源」と「大漢

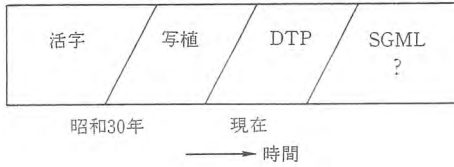


図1 組版の流れ

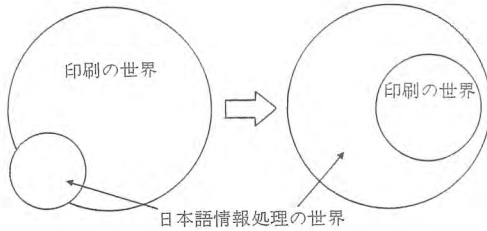


図2 印刷と情報処理の関係

(参考:長村玄「出版産業と外字問題」講演レジメ1995.7)

和辞典」に載っていない文字が六四字も存在するのである。いったいどうやって決めたのかと誰もが思う。しかし七八年当時、文字コードを決めたのかと問うのは野暮である。この年、仮名漢字変換方式の日本語ワープロが初めて登場。机よりも大きい代物の値段の高さと機能の低さは言うまでもない。それが瞬間に机にのり膝にのりポケットに入り、デパートのおもちゃ売場にすら置いてある時代が来ると、当時予想した出版人がいたのだろうか。さらに文字コードを混乱させたのが、八三年の改正であ

る。このとき異体関係を持つ文字で、第一水準と第二水準に存在するものについて二十二組の入れ替えを行い、二九四字の字形を変更した。この時点ですでにJISコードに基づくテキストデータがかなり広まっていた。字体はワープロの画面とプリンタ出力や印刷所の出力で差が生ずることはなかった。ところが、この改正で使うワープロによって該当文字がなかったり、画面で確認した文字と異なる字形でプリント出力されることとなった。たとえば、

鶯 → 鶯

鷗 → 鷗

などである。技術の進歩に合わせ変更されていくのが工業規格なら、「文字」を工業製品に取り込むことの「意味」を人が理解するまで、時代は悠長に待ってくれなかった。

#### ■文字文化の黒船(ユニコード)来襲

ネットワークが国際的になりコンピュータが標準化してくると、世界中の文字を統一的に取り扱う文字コード体系が必要となる。特に漢字文化諸国は欧米に比べ圧倒的に文字数の多いハンディがあり、文化的に閉じがちである。統一コード(ユニコード)の導入により他国文字の混在が可能になり、国際間もデータ通信にコード変換が不要で、ソフトハウスは製品の各言語向け手直しが簡略化される。

しかし漢字文化圏でも情報先進国である日本は、このユニコードの制定に対し後手に回り、IBMやマイクロソフトを中心とする米国のメーカーが主導権を握ったのである。文字文化の「黒船」的状况で「漢字を知らない欧米人に漢

字を決められた」といふと言い過ぎだが、中国と日本と韓国の漢字のうち、意味の違いを無視して形が類似しているというだけで同一コードを振った問題はやはり残る。

### ■組版規則の揺れ

人間が読む以上、組版技術が変化したところで美しい組版や読みやすい組版の基準が変わるわけがないし、文字の表記や仮名遣い、行頭に句読点がこないといった約束(組版規則)もそのままである。

もちろん四角の活字を並べるだけだった組版に対し、写植は実に多くの表現を可能にした。平体、長体、詰め印字、お望みならば斜めに組むことも容易である。この何でもありが、ビジュアルを優先する雑誌を中心にさまざまな試みを生み出した。一部の活字愛好家の意見(力強い押し活字の方が読みやすい等)は別にしても、「美しい組版」に対する異論が出る場所である。組版を表現から見ると、活字の制約が解かれたことで可能になった事は多いが、新たに生じた問題点もあったといえる。

一方、組版のプロセスから見ても、電算化は劇的な変化をもたらした。活字組版の職人が永年培った技術をそのまま電算植字に活かさないところに、もう一つの問題が生じた。活字の時代は現場職人の能力に支えられながら文字が組まれてきた。組版規則は文選技術者、植字技術者の頭脳のなかにあり、彼らのノウハウと経験により文字組版が成り立っていた。出版社は厳密な組版指定をしなくても印刷

所が対応してくれた。インハウス・ルール(出版社ごとの組版規則)は、実は出版社に明文化した規則がなく、仕事を受けている印刷所にあたりする。編集者よりも印刷所の職人の方が、その出版社の組版規則に詳しいということすらあり得た。そんな一部変則的な状況があったにせよ、組版規則はインハウス・ルールのまま決して標準化されず(あるいは標準化されるべきとは思わないまま)貴重な財産として出版文化を支えてきたのである。

電算植字ではこうはいかない。二十年、三十年の活字経験者に対し、電算植字はせいぜい十年である。ワープロ操作の少しまし程度のオペレータと称する人もいる。さらに、オペレータと活字の間にはコンピュータが介在しているのである。コンピュータに組み込まれたDTPソフトには組版規則をまるで知らない(あるいは知ろうとしない)ソフトウェア技術者によってプログラムされた代物が多々ある。一度確立していたかに見えた組版規則が揺れ動いている。

### ■行組版のJIS標準化

組版規則が工業製品に取り組まれた以上、コンピュータの理解できるような厳密なルール化が必要となった。残念ながら出版界の関心は低く、メーカー主導のなか熱心な出版人のボランティアにより、活版組版の良さをJISに留める努力が行われた。「日本語文書の行組版方法(JIS X 4051)」である。もはや編集者は電子化の流れに無関心ではいられないのである。

(東京電機大学出版局)

第17回（一九九五年度）日本生命財団出版助成図書

刊行期間平成八年四月～平成九年三月

出版部	著・編者	書名	判型	頁数	部数	定価
北海道大学	小川 正人	近代アイヌ教育制度史研究	A5	五二二頁	一〇〇〇部	七二一〇円
東海大学	藤原 鎮男	地球化学の発展と展望	A5	四一六頁	七〇〇部	七二一〇円
東海大学	加納 六郎 篠永 哲	日本の有毒節足動物——生態と環境変化に伴う変遷——	B5	四〇〇頁	一〇〇〇部	一五四五〇円
東京大学	仁井田 陞 池田 温	唐令拾遺補 附日唐両令対照一覧	菊	一三二〇頁	一〇〇〇部	四一二〇〇円
法政大学	櫻井 敏雄	浄土真宗寺院の建築史的研究	B5	三九二頁	八〇〇部	一三一八四円
京都大学	安田 章	鈴鹿本「今昔物語集」 ——影印と考証——	A4 変形	一一〇〇頁 (二分冊計)	六五〇部	二四〇〇〇円 (内税表示)
九州大学	松下 志朗	石高制と九州の藩財政	A5	四九六頁	七〇〇部	一〇三〇〇円
九州大学	村上 陽三	クリタマバチの天敵——生物的防除へのアプローチ——	A5	三八六頁	七〇〇部	七七二五円

\*日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。



1995年11月13日

文 部 大 臣  
島 村 宜 伸 殿

大 学 出 版 部 協 会  
幹 事 長 山 下 正

### 出版物の再販制度維持に関する陳情

謹啓 内外激動の折り、公務ご精励に深甚なる敬意を表します。

さて、貿易の国際摩擦から諸物価の内外価格差問題に端を発した公的規制緩和の潮流の下で、書籍・雑誌等の出版物「再販制度」が、公正取引委員会および行政改革委員会規制緩和小委員会等において検討の対象とされております。

私どもは、出版物の再販制度は独禁法で認められた趣旨に則って適正に運用され、物価の優等生として消費者（読者）メリットに貢献しているのみならず社会的にも教育・学術・文化の振興、民主社会の発展に大きく寄与していると確信しております。

独禁法適用除外制度の見直しに関する「政府規制等と競争政策に関する研究会」（「鶴田研究会」と呼ばれています）の平成3年7月の報告書においても、出版物再販制度の意義と必要性が是認されているところであります。

去る10月の全国図書館大会におきましても「著作物の再販売価格維持制度存続の決議」が採択され、また、財団法人日本文芸家協会の大多数の会員の皆さんを始めとして多くの識者・読者からも出版物再販維持の声が澎湃として上がっております。

私ども大学出版部は、大学における研究と教育の成果を学術書・専門書・教科書等として刊行することを基本任務とし、教育・学術・文化の振興にとって極めて重要な役割を担ってきております。

出版物は、教育・学術・文化上の重要な役割のみならず商品としても他と著しく異なる特性（非代替性、非反復購入性、多種大量、著作物の複製品等々）があります。これらの特性に起因する物流上の諸問題については、個々の出版関係者にとってかねてから経営上の課題として取り組んでいるところでありますが、消費者（読者）ニーズに応えるよう業界挙げてその改善にいっそう努力し、成果を挙げてまいる所存であります。

私どもは、出版物再販制度の維持を公取委、行革委をはじめ各方面に訴え続けております。

何卒、出版物再販制度の必要性にご理解をいただき、その維持にご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

敬具

## 二千年の文明を支えた紙の歴史 紙の博物館を訪ねて

情報のデジタル化と森林資源の枯渇化により、紙は情報媒体としての役割を果たさなくなるのではないかと懸念する人がいる。一方、地球環境・資源エネルギー問題への関心が高まるなかで、「地球にやさしい」紙の特性が見直されてから久しい。

今回は、我々の日常生活にあまりにも身近であるためにかえってその役割や大切さが忘れられがちになっている紙について考えることにした。

★☆☆★

「紙の博物館」は、文字通り紙に関する我が国唯一の博物館であり、その歴史も古い。

案内書によると次のように紹介されている。

「旧王子製紙株式会社の紙業史料室で、同社創立時（明治五年）からの書類・資料・文献を整理・保管していたが、太平洋戦争の結果、旧王子製紙が三社に分かれたのを機会に、昭和二十五年（一九五〇）に製紙記念館（後に紙の博物館と改称）をつくり、紙に関する博物館活動に当た

ることになった。

今では全国の製紙会社、販売会社、製紙用具製造会社などの支持により運営され、紙に関する内外の資料を一般の観覧に供し、紙の知識普及並びに研究活動を行っており、洋紙和紙を併せた紙専門の博物館である。」

（『東京の博物館』東京都博物館協議会編）

JR王子駅南口の目前、都電の線路の向う側に見える建物が目指す博物館である。本館の玄関を入ると、入館券の自動販売機があり、かたわらにパピルスの鉢植が無造作に置かれている。ペーパーの語源となったといわれるこのカヤツリグサの仲間、遠い昔の植物とばかり思い込んでいたので、意表をつかれた驚きとともに半ば拍子抜けした思いでしばらく眺める。

受付の前を右に行くと第一展示室があり、洋紙の製造工程が説明されているほか、フランス人ルイ・ロベールが一七九八年に発明したといわれる、世界初の洋紙製造機械の模型が部屋の中央に置かれている。この機械の実用化に



パピルス（カヤツリグサの一種）

もたらした「原点」とも言える「装置」である。二百年前の社会や人々の暮らしに想いを巡らせながら第二展示室へ移る。ここには、洋紙の種類と用途の資料が展示されており、温度を感じて色が変わる紙など、珍しい製品が並べられている。

第三展示室には、折り紙、切り紙、人形など紙で作られた美術・工芸品が展示されており、精巧な作品が目を惹く。第四展示室には、木簡や竹簡の書写材料や紙子（衣）など、紙を素材とする歴史的資料や生活用具などが展示されている。この部屋では、とくに千二百年前のものと言われる陀羅尼（百万塔の中に収められていた経文で、日本最古の印刷物の一つとされている）の小さな文字に見入ってしまう。小振りで素朴ながら歴史の重みを感じさせる一品である。以下、第八展示室まで続くが、日本の洋紙産業発達史の歴史と和紙関係の資料が並ぶ。

よって世界の紙は手すきから機械ずきの時代にかわり、その後改良が加えられて今日の発展をみた、と解説がある。現代の出版文化の隆盛を

一時間ほどの見学であったが、全体に小中学生から大人までの知的好奇心に応えるように展示が工夫されているように感じた。欲を言えば、「紙の未来」といった夢を語るコーナーがあればなおよかったかも知れない。いずれにしても、紙すき技術の発明（紀元一〇五年に中国人蔡倫によるとされている）以来、二千年近く人類の文明を支えた紙の歴史に圧倒される思いであった。と同時に、どれほど情報革命が進もうと、情報の担い手としての紙の役割は終わることはない、と確信した。

なお、同館では常設展示以外に、季節に合わせたテーマごとの展示も行っており、「手すき教室」をはじめ、紙を素材にした手工芸の講習会を通じて紙の知識普及活動も行っている。

（小池美樹彦）



紙の博物館

〒114 東京都北区堀船 1-1-8

TEL (03)3911-3545 月曜日、祝日休館

交通：JR王子駅南口前 都電王子駅前徒歩3分

（但し、1997年春に近くの飛鳥山公園内に移転の予定）



年末例会にて



## ▼大学出版部協会年末例会

十二月六日（水）東海大学校友会館において年末例会が催されました。例会と編集・営業・刊行助成の各部会の後、懇親会に移り、恒例により山下幹事長の挨拶でなごやかに始まりました。同氏は席上、会場に展示された平成七年の受賞図書について大学出版部の活躍ぶりを述べ、さらに公取委で検討中の再販制度見直しなどで学術出版のおかれた環境が厳しくなる中、大学出版部の担う役割の大きいことを強調されました。

## ▼加盟出版部平成七年受賞図書

平成七年に大学出版部協会加盟出版部が、各種団体や学会で主催する出版賞を受賞した図書は七大学二十二点に及びます。いずれも各界を代表する権威ある賞です。造本装丁コンクールでは、マークのデザインなどで長年、協会をデザイン面で支えていただいている道吉剛氏が、日本書籍出版協会理事賞を受賞されました。

## ▼リーフレット作成

大学出版部の理念と目的、活動を広く理解していただくために昨年度、リーフレットコンテンツで原案が選ばれました。この入選作に検討を加えたリーフレットが出来上がりました。今後さまざまな機会に配布していく予定です。

## 北海道大学図書刊行会

▼竹中のぞみ著『フランソワ・モーリヤック論—犠牲とコミュニケーション』（A5判・八二四〇円）カトリック作家モーリヤックの全作品に広く言及しながら、「犠牲」と「コミュニケーション」魂の連帯性」をキーワードに緻密に分析。作品の

主要舞台ポルドーでの研究生活を踏まえ、従来の解釈では明らかにされてこなかった、罪人たちの絶望的孤独に対する救いと希望のメッセージを伝える作家の、新しい全体像を浮かび上がらせる。混沌迷の時代に、人類の深い絆の持つ意味を問いかける意欲作。全作品の詳細な紹介を付す。

▼高村泰雄・丸山博著『環境科学教授法の研究』（A5判・九七八五円）二世紀を目前にして、地球環境問題が深刻な事態となっており、その解決は人類の未来にとって最重要課題となった。本書では、環境教育は環境科学の基本的概念や法則をすべての子どもにやさしく教える環境科学教育である、との立場から体系的な教授プランを授業実践に使える授業書として提示した。学校教育の現場だけでなく、生涯学習、市民運動の学習テキストとしても、最適である。

## 聖学院大学出版会

▼澁谷浩著『オリヴァー・クロムウェル』を準備中

▼「ひとりの政治家の生涯のスケッチを通して、まことの政治家の生き方についてヒントを得ようとする試み。国家的な共同事業に向けて、社会の伝統的な知恵や制度を活用するのが政治であろう。クロムウェルは何をもって共同事業の目的とし、それに向けて古くから受け継がれているイングランドの知恵と制度をどのように生かしたか。この間に本書は答えようとしている。平明を心懸けた本なので、著者の意とするところは一読しておわかり頂けるであろう」（「あとがき」から）。

▼ピューリタン信仰に裏付けられた議会での発言や画期的な軍政改革、めまぐるしく変化する政治情勢の中での行動と思考を追う書き下ろし評伝。時代背景や思想状況の解説も詳しくまた平易に述べられており、イギリス・ピューリタン革命クロムウェルとその激動の時代を理解する恰好の書。

## 慶應義塾大学出版会

(旧 慶應通信)

▼『持続可能性の経済学―循環型社会をめざして―』（慶應義塾大学経済学部環境プロジェクト編・二七〇〇円）、同プロジェクトは慶應義塾大学経済学部の環境経済学研究者を中心にした研究集団で、最近『地球環境経済論』（上・下）を編集、慶應通信から出版し、本書はこれに続く三冊目である。本書に収められた九編の論文は、慶大において開催されたコンファレンスで報告されたものをもとにしたもので、経済的営みと自然環境の保全が両立可能な社会、いわゆる「持続可能な循環型社会」について、経済学的な観点から詳細に分析・検討している。

▼『中国革命と国際環境―中国共産党の国際情勢認識とソ連 一九三七年―一九六〇年』（高橋伸夫著・三五〇〇円）本書は、第二次大戦期から中ソ対立が顕在化する時期の間において、中国共産党指導者の国際情勢認識の分析を通して、中国共産党が、国際環境、特にソ連から加えられた様々な圧力・要請と、革命の現場からの要請をいかに調整しようとしたか、その内包する特徴・ジレンマを明らかにすべく試みた研究書である。

## 産能大学出版部

▼『電子マネーウォーズ』（岩崎和雄・佐藤元則著、一八〇〇円）デジタル化の波は、経済社会の血液ともいえるべき「金融・決済システム」をも変えようとしている。デジタルキャッシュ、バーチャルカレンシなど呼び方は様々だが、この電子マネーを巡って、世界中の大企業やベンチャー企業が、虎視眈々とビジネスチャンスを狙っている。戦いの火蓋が切って落とされた現在、日本人社会はこの変化を飛躍の好機にできるのであるか。国際舞台で活躍する二人の著者が、実態をレポートする。▼『就職難に勝つ本』（今村博尚・落合恒男著、一五〇〇円）「就職超氷河期」の現在もバブル時代のマニユアル本が氾濫し、学生はどうしたらよいのかと行き場を失っている。また企業側もマニユアル崩しの面接に躍りになっており、既存のマニユアル本はまさに時代遅れである。本書は全国三七〇私立大学、就職部長のアンケートを基に、現在の就職状況、問題点を踏まえ、本音の部分を解説する。既存のマニユアル本では語れない本当の就職事情を的確に指導、解説した初めての書。

## 専修大学出版局

▼鈴木保昭著『すみれの花の歌——ひとつの文学鑑賞——』（新装版、三三〇〇円）春先になると、慎ましくひそやかに咲くすみれの花に魅せられる人も多いだろう。著者もその一人で、すみれを題材にした文学作品に長らく特別の関心を抱いてきた。それらを集め、編んだのが本書である。第一部では、すみれについての博物誌的な解説を行い、第二部では、山部赤人や藤原定家、国木田独步などの日本文学、第三部ではシェークスピアやバイロン、ノヴァーリスなどの海外の文学作品、第四部ではシューベルトや日本の文部省唱歌などの歌曲から、すみれに関わる作品を収録し、各作品とその周辺についての解説を付している。すみれの花に焦点をあてて文学に親しむことができる本書は、ジャンルごと、作家ごとに読むのとはまた違った、文学鑑賞のひとつのあり方を提示している。

▼専修大学今村法律研究室編『帝人事件(七)』（四三〇〇円）昭和前期の検察ファッショと政治的フレイムアップの影響を炙り出した疑獄の、予審被告尋問調書を取めた、徹視的渉猟に好適な根本史料。

## 玉川大学出版部

▼L・ポイヤール／有本章訳『大学教授職の使命—スカラーシップ再考—』（二二六六円）

昨年一二月急逝したアメリカの指導的教育者であるポイヤール・カーネギー教育振興財団理事長による本書は、出版されるや財団出版物のベストセラーとなったアメリカでは現在、本来教育・社会サービスに比重を置くべき大学が、研究型大学に追随し、大学システム全体を損なう結果を招いているという。著者は大学教員全国調査に基づき、研究か教育かという論争を乗り越えて、新しいスカラーシップ＝学識のパラダイムをつくることを提案している。アメリカより教育志向型大学の割合が少ない日本においてこのような反省はいつ生かされるのだろうか。



## 中央大学出版部

▼佐竹寛著『モンテスキュー政治思想研究—政治的自由理念と自然史的政治理論の必然的諸関係—』（四五三二円）

モンテスキュー初期の『義務論』『自然法論』などから後期の『ローマ人盛衰原因論』や『法』の精神』まで、ほぼすべての重要作品に言及し、建国期アメリカにおけるモンテスキュー受容の実証的分析まで行なう。研究内容において社会契約論者との比較研究を通じて、モンテスキュー独自の自然史的政治理論をいちはやく評価し、今日の思想史研究の先駆的成果と位置づけうる最新の内容を含む。

▼F・アルトハイム『小説亡国論』福田宏年訳（二〇六〇円）

小説は近代ヒューマニズムを代表するポジティブな文学形式として評価されてきたが、古代にも小説は存在した。古代末期のデカダンスの時代に出現し、古代が終わるとともに小説も終わった。近代小説もわれわれが思い込んでいたほどポジティブなものではないかもしれない。その意味では本書はホイジンガーの『中世の秋』、シュペンラーの『西洋の没落』に比肩しうる近代批判の書である。

## 東海大学出版会

▼香取草之助監訳『授業をどうする!』  
(定価一五四五円)

本書は二部から構成されている。第一部は、カリフォルニア大学バークレー校の学生によって選ばれたエクセレント・ティーチャー(優秀教員)から収集した授業改善に関する具体的なノウハウを収録し、第二部では、学生が講義内容を理解しているかどうかを、教師が知るための方法として東海大学が取り入れている「Minute Paper」の実施例を紹介する。授業改善を目的とする東海大学のFaculty Development(組織的教授団の能力開発)調査関係者のみが本書を活用してきたが、学内外を問わず広く教育に携わる人々の参考になれば、と翻訳出版に至った。



## 東京大学出版会

ナチュラリストリーは、自然の多様性や歴史を総合的に理解しようとする学問である。その起源は遠くアリストテレスの時代にまでさかのぼり、自然を研究する学問として長い道のりを歩んできた。近年では、人間と自然とのかかわりについての関心の高まりにもなっており、その研究・教育の重要性があらためて認識されつつある。

小会 of ナチュラリストリーシリーズは、これからの日本のナチュラリストリー研究の新しい方向性をさぐるとともに、若きナチュラリストのための新しいタイプの「教科書」となることをめざして、一九九三年一月『日本の自然史博物館』(糸魚川淳一著・定価四二〇〇円)から刊行を開始し、継続刊行中である。最新刊『両生類の進化』(松井正文著・定価四七三八円)は、初めて陸に上がった動物たちの自然史をダイナミックに描いたもので、日本で最初の両生類学の教科書ともなった。また、五月には岩槻邦男著『シダ植物の自然史』が上梓する予定である。

## 東京電機大学出版局

職人盡絵は、種々の職人の有様や風俗を集めて描いた絵であるが、その歴史は古く、鎌倉時代の末までさかのぼる。これは歌合の形式から始まって、和歌を伴った職人盡の絵巻として発達し、やがて室町以降には独立した風俗画の一種となった。この流れをくむ江戸時代の職人盡絵が、当時たった一つの文化の窓口であった長崎に、彫物絵として残されている。

この彫物絵について、著者等が長年研究した成果をこの度まとめ、日本生命財団の出版助成を得て出版することになった。内容は、職人の生活と伝統技術を多数の写真によって詳しく分析し、さらに各職人の歴史についてもわかりやすく解説したものである。

### 江戸文化を語る彫物絵の分析



江戸時代の職人尽彫物絵の研究  
小山田了三他著

A4判, 176頁, 箱入り上製本, 定価18000円

## 東京農業大学出版会

▼穴瀬真・安富六郎編「土壌水分制御／乾燥・半乾燥地のアグロフォレストリー」(本文英文) ハードカバー、B5版325頁。世界の陸地面積の約30%は乾燥地・半乾燥地に属し、世界の農業生産のかなりの部分はこの地域で行われるが、農業生産の安定、持続性は土壌水分とその制御によって大きく影響を受ける。また、これらの地域に砂漠化、塩類集積、土壌侵食等の問題が存在し、地球規模の環境問題となっている。本書は、乾燥地における土壌水分制御、アグロフォレストリー等の土地利用・持続的農業について、海外および日本国内から87名の第一線研究者が参加して、45課題が分担執筆されており、乾燥地農業に対する今後の有益な指針を示している。

▼安富六郎編「半乾燥・湿润地域の水分管理と作物生産」(本文英文) ハードカバー、B5版209頁。本書は前述の姉妹書で、国内18名の第一線研究者が分担執筆し、半乾燥地・湿润地域の土壌と気候、土壌管理、作物生理、アグロフォレストリー、ウォーターハーベスティングなど4章12課題がまとめられている。

## 法政大学出版局

▼『ギョクスター・グラスの40年——仕事場からの報告』(高本研一・斎藤寛記) ドイツはもとより現代世界を代表する作家であり、スケッチや版画の創作でも一家をなすとともに行動する思想家でもあり、こよなく生活を愛する人間としても知られるギョクスター・グラス——その40年にわたる業績を、グラス自身の文章と絵画・彫刻、カバー・デザイン、日記や書簡・断片、創作のメモにおよぶ豊富・多彩な写真と図版によってあとづける。作家自身が工房の隅々までを案内し、私的な生活をも語る本書によって、〈描くことと書くこと〉の密接に結び合う、グラス独自の創作の秘密がはじめて明らかにされる(三六四頁／内カラー二四頁)。



B5判・上製力パー装／定価九九九一円  
『ブリキの太鼓』カバー下絵

## 放送大学教育振興会

▼放送大学は、放送教材(テレビ・ラジオ)と印刷教材とで授業を行う、まったく新しいタイプの教養学部をおく正規の大学(通信制大学)である。

▼開設から今年で十二年目。今までに送り出した卒業生は、二十二歳から九十一歳までの七、一九二名。社会経験も職業も学歴も多種多様で、他大学の大学院への進学者も出ている。キャッチフレーズは「学びたい!」それが入学資格です!だが、十八歳以上であれば、だれでも学習できる、「生涯学習」時代を象徴するような大学である。

▼その授業に使われる印刷教材の編集・発行が、わが放送大学教育振興会の大きな役割である。平成8年の新刊は七十六点。放送大学の第一学期の開設科目三十八点の中に含まれて、三月には学生の手に届けられた。

▼市販本の売れ行きも好調。新刊書では『南アジアの歴史と文化』(辛島昇)、『経済学入門』(嘉治元郎・新飯田宏)、『高齢社会の生活設計』(本間博文・松村祥子)、『応用人間工学』(池田良夫)など、特に興味と関心を呼んでいる。



## 明星大学出版部

▼森下恭光・佐々井利夫共著『増補 道德教育の研究』A5判 定価二〇六〇円  
本書は大学の教職課程の中に設けられている「道德教育の研究」という科目のテキストとして執筆されたものである。著者は序文の中で道德教育とは何かについて「現実の道德教育は、学校という場所でのみ行われるという事を期待しているが、学校に限定して期待するのは誤りであり、道德は広い意味での人間教育であらねばならない」と述べている。本文構成 道德教育の意義と必要性、道德教育の可能性、発達観の道德教育、明治以降の道德教育の展開、子どもの生活と道德、小・中学校における道德の時間と指導法、付録として道德教育のための手引書要綱、小学校・中学校学習指導要領。

▼福島茂明・森竹英世・菱山覚一郎共著『社会科教育の本質を探る―理論と実践の結合―』現在進行中の本書は、社会科の教材について、また「新しい学力観」と社会科、国際化・情報化に対応する社会科とは何かについて、社会科教育の事例をふんだんに取り入れながら社会科教育の本質を明らかにする。

## 早稲田大学出版部

▼『ジェームズ四世のロマンス』(グリーン／大井・冬木訳、二二六〇〇円)は、シェイクスピアの登場を準備したとも言える先駆的作品。グリーンを本格的にわが国で紹介する初の試みで、本邦初訳。エリザベス朝喜劇10選第Ⅱ期全10巻／第1巻。▼シリーズ比較家族⑤『家族と地域社会』(岩本由輝・大藤修編、三八〇〇円)、⑥『家・屋敷地と霊・呪術』(長谷川善計・江守五夫・肥前栄一編、三七〇〇円)を刊行した。⑤は家族が地域社会とどのように関わってきたのか、日本と西欧、アジア等との比較をおとして論じる。⑥は家・屋敷地が家族生活の拠点であり、土地制度をはじめ社会経済史においても重要な意義をもつことを明らかにし、宗教観念との結び付きを検証する。

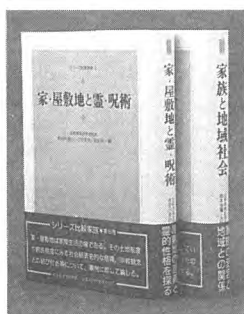
## 名古屋大学出版会

▼田村栄子著『若き教養市民層とナチズム―ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』(定価五九七四円) 教養と「フォルク」のあり方を問い、ナチス「革命」の能動的な担い手と化してゆく若き知的エリートとその思想の生成過程を総合的・社会的に解明した力作。

▼田中恭子著『土地と権力―中国の農村革命』(定価六一八〇円) 台湾内務省の所有する秘密資料を駆使して、中共政權成立の最大要因とされる内戦期解放区の農村革命の実態と革命への寄与度、そして現代中国政治の原型を解明する。

▼出口晶子著『川辺の環境民俗学―鮭遡上河川・越後荒川の人と自然』(定価五六六五円) 新潟県荒川をフィールドに昭和三十年代の水辺に生きた人と自然、その民俗と変遷を掘り起こし、環境保全を人文科学の立場から問いなおす。

▼今津孝次郎著『変動社会の教師教育』(定価五一五〇円) 教師になる教員養成と教師になってからの現職教育を総合する教師教育の原理を社会変動というマクロな視点で捉え直し、学校教育の再生に向けて問題点と課題を探索する。



## 京都大学学術出版会

近年の多様な海外事情、国際社会のなかで指針を与える学問として地域研究が注目されているが、これには人文社会科学の行き詰まりという背景がある。世界に近代化をもたらした西洋近代科学を再編成し、新しい知の枠組みの探求として地域研究が求められているのだ。さらに、地域の固有性を世界のなかで考える地域研究は、人文・社会科学であり自然科学をもとり込まねばならない。自然環境の制約を避けることができず、またその歴史をひきずる各々の地域の生態理論を学ぶことが、地域研究には不可欠なのだ。

京都大学東南アジア研究センターは、新しい学問領域としてとり組んでいる「地域研究」の成果を『地域研究叢書』として順次刊行していくことになった。

▼Ⅰ『マレー農村の20年』(坪内良博)マレー半島の一農村の変貌を詳細に辿る。

▼Ⅱ『世界単位 から世界を見る』(高谷好一)世界観を共有できる範囲を世界単位と呼びそこから世界を論ずる。

▼Ⅲ『地域研究の問題と方法』(立本成文) 諸科学の活性剤ともなりうる「地域研究」を科学する。(Ⅲは10月刊行予定)

## 大阪経済法科大学出版部

▼田和俊輔著『EUの政治的統合と英連合王国の新刑事訴訟法とオーストリアの刑事訴訟法の特徴』(定価一五四五円)

オーストリア刑事訴訟法は、ドイツ法圏にありながら、ドイツで一九七五年に廃止された予審を今なお堅持し、捜査主体が警察(治安機関)でなく検事である。逮捕を含む強制処分権が予審事に握られている。警察調書には原則として証拠能力が認められていない等々様々な特徴を有する。EU統一を目前に、特異な奥刑訴訟法や英米法と大陸法の法制度の統一調整には様々な困難が予想される。刑事訴訟法からEUの統一を見る。

▼及川伸著『現代法講義』法律が必要とされている理由は? 現代の法はどのように形成されているか? 経済社会の発展に法はどのように関わっているか? 知的所有権はどのように保護されているか? 国際機構と国際人権保障の発展はどのようなものであるか? 科学技術の発展は法にどのような影響を与え続けるか? 一四章からなる疑問に答える形で構成されている。初学者、法律に関心のある人に格好の現代法入門書。

## 関西大学出版部

▼大庭脩編著『享保時代の日中関係資料三(荻生北溪集)』(定価一〇〇〇〇円)

紅葉山文庫の新渡来書を縦横に利用しながら八代将軍徳川吉宗の疑問に答えていった真のブレインは、荻生徂徠の弟の北溪だった。その子孫の家蔵資料をはじめとする北溪の全集が今、初めて世に出る。紅葉山文庫で発見した徂徠研究者も見逃していた徂徠の真跡も含む。▼D・イーガン著『折鶴』(定価三五〇〇円)

ノーベル賞候補で、米国ではすでに現代の代表的詩人として揺るぎない評価を得ているイーガンが、特に日本の読者のために選んだ珠玉の作品集。日本語による初めての出版。アイルランド人の鋭い感性で人間愛と世界平和をうたう。英和対訳で二倍楽しみ味わえる。未出版の原詩作品も収録。▼岡田至雄著『経営組織論―社会学的視点からのアプローチ』(定価四〇〇〇円)

個人の組織行動の分析枠組とその実践的課題、経営組織の本質的構成要素と戦略的有効モデルの策定、産業民主主義・組織民主主義の実態と展開といった諸問題に対し、社会学の視点から詳細に内実を考察。

## 九州大学出版会

▼九州大学出版会創立二十周年記念新装復刊。昭和五十年三月に西日本一帯の国公立各大学の共同学術書出版会として発足して最初の十年間の刊行書の内、高い評価を受けながらも品切状態にあった九点を選び（後掲「新刊案内」参照）、装いを新たに、改めて世に問う。三月一日同時刊行。▼『明治期紡績関係史料』岡本幸雄編・A5判四三六頁・八七五五円。日本生命財団助成図書。わが国工業化の先駆をなした紡績業に関する明治期の貴重な史料を精選編集して、詳細な解説を付す。長い研究生活の中で広く全国にわたって発掘・収集した膨大な原史料は、学界の共有財産として広く利用され、経営史のみならず、経済史、産業史等の研究の進展に寄与するであろう。

▼YUSHO: A Human Disaster Caused by PCBs and Related Compounds 倉恒匡徳他編・小B5判三八四頁・一二三六〇円。日本生命財団助成図書。人類史上未曾有の食中毒「油症」研究の集大成であり、また今日地球的規模で拡がっている深刻なPCB汚染対策の基礎情報を提供するために英文のモノグラフとして刊行。

## 流通経済大学出版社

▼流通経済大学社会学部八田正信教授の社会調査グループでは、大学生が毎日の生活のなかで、マス・メディアとどのような接触の仕方をしているのか、その実態を明らかにするために「大学生のメディア接触の実態に関する調査」を実施し、このほど、その調査結果を報告書として取りまとめた。内容は、マス・メディアとの接触状況、マス・メディアの報道についての満足度、日常生活における情報源、阪神・淡路大震災の発生時におけるマス・メディアの報道、マルチメディアについての関心度などである。この調査の対象となる大学生には、本学のほかに東京圏二大学、大阪圏二大学の協力により、地域別属性も調査できた。

▼流通経済大学社会学部天野栄一助教授の社会調査グループでは、「水海道市における地域住民の福祉意識に関する調査」を実施し、このほど、その調査結果を報告書として取りまとめた。内容は、地域住民の福祉意識、福祉に関する関心度、生活環境の評価、老人の介護、行政の福祉政策に対する評価や要望など、さまざまな角度からの社会調査である。

## 大阪大学出版会

阪神大震災では店頭にある本の損害額だけで約13億円にのぼると推定される。出版界に与えた大きな衝撃の報告と証言は『阪神大震災と出版』（日本エディタースクール刊）に詳しい。小会のスタッフも執筆に加わっている。

この震災で避難生活を余儀なくされた著者の本がちょうど1年後にできた。言い訳にしたいからと「あとがき」にもあえて記されなかった。▼赤木富美子著『フランス演劇から見た女性の世紀』（定価六一八〇円）17・18世紀のパリで人気を博したモリエールやマリヴォー劇のなかの女性を通じ、特に「コケット」に視点をあて、19・20世紀の女性よりも生き生きと活躍していたことを描く。ポスト近代の展望を拓く力作。

▼竹内常善・阿部武司・沢井 実編『近代日本における企業家の諸系譜』（定価六一八〇円）日本経済の二重構造といわれる一方の側々中小企業の歴史的展開過程を総合的に分析。「共著」ではなく「共同研究」の意義をいかになく發揮してまとめた研究書で、学問・研究の進め方にも一石を投ずる。

# 新刊案内 '96 · 1 ~ '96 · 3

(表示価格は税込みです)

## ■北海道大学図書刊行会

- フランソワ・モリーヤック論―犠牲とコミュニケーション 竹中のぞみ 八二四〇円  
 環境科学教授法の研究 高村泰雄・丸山 博 九七八五円  
 記録史料の管理と文書館 安藤正人・青山英幸編著 八八五八円  
 シンポジウム尊厳死―普通の人の生と死― 坂井昭宏編著 二八八四円

## ■聖学院大学出版会

- 慶應義塾大学出版会(旧慶應通信)  
 福澤諭吉と桃太郎―明治の児童文化― 桑原 三郎 四八〇〇円  
 中国指導層の統計的分析―中国研究への多変量解析の導入― 中川 昌郎 四〇〇〇円  
 障害学生の支援―新しい大学の姿―AHEAD 日本会議より― 富安 芳和編著 二五〇〇円

## ■慶應義塾大学出版会(旧慶應通信)

- 持続可能性の経済学―循環型社会をめざして―  
 慶應義塾大学経済学部環境プロジェクト編 二七〇〇円  
 神戸寅次郎 民法講義(慶應義塾大学法学研究会叢書60) 津田 利治/内池 慶四郎編著 六七九八円  
 国家と権力の経済理論(慶應義塾大学法学研究会叢書61) 田中 宏 二七八一円

## ■アメリカ大統領選挙研究(慶應義塾大学法学研究会叢書62)

- 太田俊太郎 六四八九円

- 中国革命と国際環境―中国共産党の国際情勢認識  
 とソ連 一九三七―一九六〇年― 高橋 伸夫 三五〇〇円

## ■産能大学出版部

- 就職難に勝つ本 不安な時代の経営 改訂版・企業提携の時代 現場主義の崩壊 電子マネーウォーズ 持株会社解禁のすすめ 新・業務改善の考え方・進め方  
 「KAIZEN」マネジメント 目標達成力強化マニュアル 強い会社をつくる賃金の決め方 共働によるマネジメントの基本  
 今村博尚・落合恒男 一五〇〇円  
 田辺 昇一 一五〇〇円  
 後藤光男・新田喜男 三〇〇〇円  
 佐々木康夫 一八〇〇円  
 岩崎和雄・佐藤元則 一八〇〇円  
 二味 敵 一八〇〇円  
 森谷宜暉・山下福夫 二六〇〇円  
 藤田精一・東澤文二 一九〇〇円  
 篠田 修 二八〇〇円  
 弥富 拓海 二二〇〇円

## ■産能大学経営開発研究本部編

- テクノ・マーケティング戦略 山之内昭夫編著 二二〇〇円  
 セールスに困ったときに開く本 碓井 實 一五〇〇円  
 生き残る社長の条件 菱川 文博 一八〇〇円  
 マーフィー愛の名言集 マーフィー理論研究会編著 一五〇〇円  
 未来の終焉 J・ジンペル著/三木亨訳 一八〇〇円

## ■専修大学出版局

- 今村力三郎訴訟記録23 帝人事件(七)

すみれの花の歌——ひとつの文学鑑賞——  
専修大学今村法律研究室編

四三〇〇円

宇宙・銀河・星〈新版地学教育講座⑬〉

地学団体研究会編 二五七五円

鈴木 保昭 三三〇〇円

近代科学の源流を探る——ヨーロッパの科学館と史跡ガイドブック——  
菊池文誠編 二二六六円

■玉川大学出版部

新制大学の誕生——戦後私立大学政策の展開——

土持ゲリー法一 七二一〇円

大塚 豊 一二九七八円

現代中国高等教育の成立

荻野 忠則 二八八四円

知と愛——いのちを育む心育て——

ドイツの学校と大学 Ch・フェール／天野正治他訳 六一八〇円

大学教授職の使命——スカラシップ再考——

L・ポイヤール／有本章訳 二二六六円

人間形成論——教育学の再構築のために——

岡田渥美編 七四一六円

教育的日常の再構築

和田修二編 八二四〇円

■中央大学出版部

モンテスキュー——政治思想研究——政治的自由理念と

自然的政治理論の必然的諸関係—— 佐竹 寛 四五三二円

ドイツ企業法判例の展開

丸山秀平編著 二八八四円

国際社会における法の普遍性と固有性

丸山秀平編著 二八八四円

FOUNDATION RESEARCH IN ACCOUNTING

日本比較法研究所編 三二九六円

小説亡国論 フランツ・アルトハイム／福田宏年訳

R. Matessich 三〇九〇円

現代銀行の実証的研究

鹿兒嶋治利 二〇六〇円

■東海大学出版会

地震と火山〈新版地学教育講座⑫〉

地学団体研究会編 二五七五円

大震災——そのとき地質家は何をしたか——

柴崎達雄・植村武・吉村尚久編 六一八〇円

音文化とFM放送——その開発からマルチ・メディアへ——

松前 紀男 三六〇五円

ギリシヤ悲劇研究序説

古典に見る『地学の歴史』

丹下 和彦 五六六五円

フラウイオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記

清水 大吉郎 四六三五円

量子物理化学の基礎

およびインド誌 大牟田章訳註 三九一四〇円

生物海洋学(第3版)

高橋正征編著 四九四四円

多文化主義の記号論〈記号学研究⑩〉

日本記号学会編 二八八四円

大企業体制の興亡——市場の反乱——

勝又 壽良 二八八四円

VARIATION IN THE ASIAN MACAQUES

京都大学霊長類研究所編 三二九六円

■東京大学出版会

学習と発達〈認知心理学5〉

波多野誼余夫編 三五〇二円

革命の中央アジア——あるジャディードの肖像

小松 久男 二六七八円

〈中東イスラム世界7〉

神谷和也・浦井 憲 三五〇二円

経済学のための数学入門

権上康男ほか編著 八二四〇円

20世紀資本主義の生成——自由と組織化

ヴォルガの革命——スターリン統治下の農村

奥田 央 一五九六五円

放射性廃棄物と地質科学―地層処分現状と課題

島崎英彦ほか編著 六六九五円

活断層とは何か 池田安隆・島崎邦彦・山崎晴雄 一八五四円

tRNAの分子遺伝学〔UPバイオロジー96〕

小関 治男 一六四八円

枢密院会議事録88・昭和篇46 国立公文書館所蔵 一六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇70

国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇96

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

大日本史料 第五編之八 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円

大日本史料 第十二編之八 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円

思考〔認知心理学4〕 市川伸一編 三五〇二円

講座世界史8 戦争と民衆―第二次世界大戦

歴史学研究会編 二四七二円  
加藤 信明 二八八四円

ギリシア哲学史 サブジェクトからプロジェクトへ

ヴィレム・フルツァー著／村上淳一訳 二八八四円

生きているトロツキイ 佐々木 力 二五七五円

明治思想における伝統と近代 松本三之介 四五三二円

財政学〔第2版〕 貝塚 啓明 二六七八円

大気・海洋の相互作用 鳥羽良明編著 四九四四円

両生類の進化 松井 正文 四七三八円

森林持続政策論 小澤 普照 六七九八円

日本荘園絵図聚影 一下 東日本二 東京大学史料編纂所編 五六六五〇円

枢密院会議事録89 昭和篇47 国立公文書館所蔵 一六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇71・72 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録 昭和篇97

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

大日本史料 第五編之九 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円

大日本史料 第十二編之九 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円

講座世界史9 解放の夢―大戦後の世界 歴史学研究会編 二四七二円

出来事としての読むこと 小森 陽一 二〇六〇円

中国の産業化と地域生活 青井和夫編 九四七六円

日本の教育システム―構造と変動 天野 郁夫 四九四四円

ヨーロッパロイドイツへの道―統一ドイツの現状と課題 坂井榮八郎・保坂一夫編 四七三八円

国際関係研究入門 岩田一政ほか 三〇九〇円

量子光学 松岡 正浩 四二二〇円

ローカル気象学〔気象の教室2〕 浅井 富雄 三六〇五円

SASによる回帰分析〔SASで学ぶ統計的データ解析6〕 芳賀敏郎ほか 三二九六円

日本古代荘園図 金田章裕ほか編 一四四二〇円

東アジア冷戦と韓米日関係 李 鍾元 五五六二円

大学食之物語 有馬 朗人 二八八四円

シャルダン『イスファハン誌』研究 羽田 正編著 二二六六〇円

17世紀イスラム都市の肖像 東京大学史料編纂所写真真帳目録3 八七五五円

枢密院会議事録90・昭和篇48 国立公文書館所蔵 一六四八〇円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇73・74 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇98 国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

大日本史料 第五編之十 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円

大日本史料 第十二編之十 東京大学史料編纂所編 一五四五〇円

制御工学下—現代制御理論の基礎〈理工学講座〉

深海登世司他 一八五四円

■東京電機大学出版局

電気・電子・情報系の基礎数学Ⅲ—複素関数と偏微分方程式

入門カテゴリーテレビ 改訂版

児童福祉 直川 一也 二九八七円

文系学生のためのBASISCAD/CAMにおける曲線曲面のモデリング

安藤 豊・中野 実 二六七八円

食品化学

デザイン材料 清水 敬子 一八五四円

材料力学—機械技術者のために〈理工学講座〉

■東京農業大学出版会

盆栽技術入門—盆栽を始めてみませんか—

穂坂衛著 斉藤剛他訳 四九四四円

基礎化学の計算法〈化学計算法シリーズ〉鈴木善孝他 一七五一円

PCシークエンス制御—入門から活用へ 吉本 久泰 二二六九円

サッカーおもしろ科学—科学的分析に基づいた合理的な練習 大橋二郎・掛水 隆 一七五一円

第二種情報処理試験〈合格精選400題〉(午前) 荒川 幸式 一六四八円

第一種情報処理試験〈合格精選400題〉(午前) 荒川 幸式 一八五四円

システムアドミニストレータ試験

システムアドミニストレータ試験

〈合格精選400題〉 荒川 幸式 一六四八円

江戸時代の職人畫影物絵の研究 小山田了三編著 一八〇〇円

アプリケーションエンジニア試験受験テキスト 日本ユニシス 二五七五円

電子物性工学〈理工学講座〉 今村 舜仁 三一九三円

図解 機械材料 改訂版 打越 二彌 二七八一元

ICの基礎 3訂版 岩崎臣男監修 二五七五円

〈新・数学とコンピュータシリーズ③〉

BASICによる高校数学 片桐重延監修 二五七五円

微分・積分学の基礎 鶴見和之編著 一六四八円

盆裁技術入門—盆裁を始めてみませんか—

植松 敬 一八〇〇円

SOIL MOISTURE CONTROL IN ARID TO SEMI-ARID REGION FOR AGRO-FORESTRY 穴瀬 眞・安富六郎編 五六〇〇円

WATER MANAGEMENT AND CROP PRODUCTION IN SEMI-ARID AND HUMID REGIONS 安富六郎編 三六〇〇円

■法政大学出版局

アメリカ演劇(8) ニール・サイモン特集 全国アメリカ演劇研究者会議発行 一〇三〇円

旅のはじめに—ニューヨーク知識人の肖像—

D・トリリング／野島秀勝訳 五九七四円

出産と生殖観の歴史 新村 拓 二九八七円

個人について P・ヴェーヌ他／大谷尚文訳 二二六六円

ユダヤ人とドイツ E・トラヴェルソ／宇京頼三訳 三二九六円

聖句の彼方—タルムード、読解と講演— E・レヴィナス／合田正人訳 三九一四円

古代憧憬と機械信仰—コレクションの宇宙— H・ブレデーカンフ／藤代幸一・津山拓也訳 二四七二円

政治的風景—自然の美術史—

民族主義・植民地主義と文学

中国との再会—一九五四—一九九四年の経験—

第三帝国下の科学

魔女・産婆・看護婦—女性医療家の歴史—

エリアス・カネッティ—変身と同一—

批判的理性の社会哲学—カント左派とヘーゲル左派—

ドゥルーズの哲学  
大衆の装飾

哲学(47号) 特集\*国家と民主主義

ナチュラリスト(上・下)

E・O・ウィルソン／荒木正純訳 上—一六四八円 下—二四七二円

敗者の祈禱書

南島貝文化の研究

◎日本生命財団出版助成図書

占領期メディア分析

統合と多様化—新しい変動の中の間人と社会—

法政大学第15回国際シンポジウム

二二六六円

二二六六円

一五四五円

四四二九円

二二六六円

三三九九円

四六三三円

三二九六円

三九一四円

一八五四円

四〇一七円

二二六六円

九九九一円

四九四四円

子どもの描画心理学

スポーツ社会学研究(4)

■放送大学教育振興会

地域社会と教育(改訂版)

学習心理学(改訂版)

認知心理学(改訂版)

人格心理学

精神分析学

カウンセリング

青年心理学

教育・経済・社会

哲学入門

科学の哲学

老荘思想

宗教の哲学

国文学入門

上代の日本文学

古代ギリシャ・ローマの文学

日本の近代

日本の歴史と文化

朝鮮の歴史と文化

南アジアの歴史と文化

アメリカの歴史

ヨーロッパの歴史

美術史と美術理論(改訂版)

民族音楽学理論

G・V・トーマス他／中川作一監訳 二四七二円

日本スポーツ社会学会発行 一九五七円

岡崎 友典 二二七〇円

金城 辰夫 一八五〇円

小谷津孝明・星 薫 二五八〇円

鈴木乙史・佐々木正宏 二一六〇円

牛島 定信 一七五〇円

水島 恵一 一七五〇円

久世 敏雄 一八五〇円

金子元久・小林雅之 二一六〇円

渡邊 二郎 二二七〇円

伊藤 笏康 二〇六〇円

池田 知久 三九一〇円

量 義治 二〇六〇円

堤 精二・島内裕子 二〇六〇円

稲岡 耕二 二〇六〇円

逸身喜一郎 二九九〇円

青木和夫・吉田 孝 一八五〇円

鳥海 靖 二〇六〇円

武田 幸男 二六八〇円

辛島 昇 二四七〇円

紀平 英作 二二七〇円

横山 紘一 一八五〇円

木村 三郎 三三〇〇円

徳丸 吉彦 一八五〇円



舞台芸術論	渡辺 守章	二八八〇円	サービス産業論	伊東 光晴	二一六〇円
日本音楽の基礎概念	竹内 道敬	一八五〇円	社会調査の基礎	岩永雅也・大塚雄作・高橋一男	二一六〇円
人文地理学(三訂版)	西川 治	二二七〇円	都市と農村	米山 俊直	一四四〇円
文化人類学	祖父江孝男・原尻英樹	二二七〇円	情報基礎管理学	高橋 三雄	二六八〇円
家庭生活の経済	御船美智子	二四七〇円	産業と情報社会	藤本 義治	二四七〇円
衣・食・住の科学	酒井豊子・本間博文	二二七〇円	応用人間工学	池田 良夫	二二七〇円
ファッションと生活	酒井豊子・藤原康晴	二一六〇円	材料工学と産業・社会	坂本 千秋	二一六〇円
食物の特性とその役割	五十嵐脩・今井悦子	二四七〇円	都市計画論	都倉 信樹	二二七〇円
食生活の現代的課題	豊川 裕之	二一六〇円	プログラミンの基礎	都倉 信樹	三六一〇円
母性の健康科学	岩崎 寛和	三三〇〇円	日本の技術と産業の発展	高橋 礼可	二四七〇円
乳幼児の健康科学	加藤 精彦	二二七〇円	線型代数Ⅱ	栗原 考次	二七八〇円
成人の健康科学	鬼頭昭三・木下安弘	二一六〇円	解析学(新版)	松原 聖	二六八〇円
老年期の健康科学(改訂版)	鬼頭 昭三	二二七〇円	データとデータ解析	上村 洸	三八一〇円
発がんとその予防	山本 雅・鬼頭昭三	二二七〇円	統計の考え方	阿部 龍蔵	一八五〇円
社会福祉の方法	三ツ木任一・山田知子	二四七〇円	物質科学―物理編(改訂版)	井上 祥平	二二七〇円
高齢社会の生活設計	本間博文・松村祥子	二五八〇円	光と電磁場(改訂版)	日高 敏隆	一八五〇円
法と裁判	竹下守夫・木暮 得雄	二〇六〇円	生物有機化学(改訂版)	濱田隆士・小尾信彌	三〇九〇円
経済法	丹宗 暁信	二二七〇円	植物生理学	小尾信彌・濱田隆士	二二七〇円
政治学入門	齊・久保文明・川手良枝	一七五〇円	動物の行動と社会(三訂版)	濱田隆士	二六八〇円
先進諸国の政治(改訂版)	下斗米伸夫・高橋直樹	一七五〇円	地球と宇宙(地球編)	平賀正子・藤井洋子	二六八〇円
第三世界の政治(改訂版)	高橋 和夫	二二七〇円	地球と宇宙(宇宙編)	傅田 章	二〇六〇円
現代の行政	森田 朗	一七五〇円	固体地球		
経済学入門(新版)	嘉治 元郎	一四四〇円	英語Ⅰ(96)		
現代の経済学	嘉治元郎・新飯田宏	二五八〇円	中国語Ⅲ(改訂版)		
日本の経営・欧米の経営	吉森 賢	二二七〇円			
経営学	森本 三男	一四四〇円	■明星大学出版部		
財務管理	古川 浩一	一八五〇円	増補 道德教育の研究	森下恭光・佐々井利夫共著	二〇六〇円
会計学	小川 洌	一四四〇円			
経営工学総論	熊谷 智徳	三三〇〇円	■早稲田大学出版部		

スウェーデンを検証する「増補版」 岡沢 憲夫 二〇〇〇円

ニュース英語の翻訳プロセス―異文化間 コミュニケーションとしての一考察― 藤井 章雄 二五〇〇円

平和研究 第二〇号 特集・21世紀へのオルタナティブ 日本平和学会編 三二〇〇円

シリーズ比較家族 岩田由輝・大藤修編 三八〇〇円

5 家族と地域社会 家・屋敷地と霊・呪術 長谷川善計・江守五夫・肥前栄一編 三七〇〇円

6 家・屋敷地と霊・呪術 エリザベス朝喜劇10選 第二期・全10巻／第5回配本 1 ジェームズ四世のロマンス R・グリーン／大井邦雄・冬木ひろみ訳 二六〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書 洋学篇／第9回配本 第7巻 大槻玄沢集 IV 杉本つとむ編 三〇〇〇円

名古屋大学出版会 平生鈞三郎自伝 平生鈞三郎 五六六五円

若き教養市民層とナチズム ドイツ青年・学生運動の思想の社会史― 田村 栄子 五九七四円

川辺の環境民俗学―鮭遡上河川・越後荒川の人と自然― 出口 晶子 五六六五円

土地と権力―中国の農村革命― 田中 恭子 六一八〇円

知の歴史社会学―フランスとドイツにおける教養 1880～1920― F・K・リンガー／筒井清忠他訳 五六六五円

空間構成・表現のための図学 峯村吉泰・横澤肇他 二〇六〇円

大気水圏科学からみた地球温暖化 半田 暢彦編 八二四〇円

京都大学学術出版会

中国中世史研究 続編 中国中世史研究会編 六四〇〇円

マレー農村の20年〈地域研究叢書I〉 坪内 良博 四二〇〇円

「世界単位」から世界を見る〈地域研究叢書II〉 高谷 好一 五二〇〇円

満洲語文語文典 河内 良弘 六二〇〇円

中国書史 石川 九楊 一〇〇〇〇円

中国仏教石経の研究―房山雲居寺石経を中心に 氣賀澤保規編著 六五〇〇円

近世の市場経済と地域差―物価史からの接近 草野 正裕 六二〇〇円

大阪経済法科大学出版部 中国社会主義の再生 杉野 明夫 二五七五円

ドイツ経済史研究 川久保公夫 七九三一元

関西大学出版部 享保時代の日中関係資料三〈荻生北溪集〉 大庭 脩編著 一〇〇〇〇円

―近世日中交渉史料集四― 九州大学出版会 現代タイ農民生活誌―タイ文化を支える人びとの暮らし― 丸山孝一編著 三二九六円

YUSHO: A Human Disaster Caused by PCBs and Related Compounds 倉恒匡徳ほか編 一三三六〇円

明治期紡績関係史料 岡本幸雄編 八七五五円

国際社会の転換と生活〈九州産業大学公開講座8〉 Processing Empty Subjects in Japanese: Implications for the Transparency Hypothesis 坂本 勉 五六六五円

現代イギリスの中等教育改革の研究 望田 研吾 七二一〇円

新刊案内

32

ウランの生体濃縮  
分割相続と農村社会

現代中国経済の構造分析

奥行運動による三次元構造の知覚

北部九州における方言新語研究

日本海軍史研究「新装復刊」

ケルゼン法学の方法と構造「新装復刊」

ドストエフスキー・ノート「罪と罰」の世界「新装復刊」

映像学・序説―写真・映画・テレビ・眼に見えるもの「新装復刊」

孤獨の政治学―ルソーの政治哲学試論―「新装復刊」

R・ポラン／水波・田中・西嶋共訳 五六六五円

歴史学の伝統と革新―ベルギー中世史学による寄与―「新装復刊」

L・ジェニコ／森本芳樹監修 三九一四円

現象学からスコラ学へ「新装復刊」

E・シュタイン／中山善樹編訳 四六三五円

日本における海洋民の総合研究(上)「新装復刊」

―糸満系漁民を中心として― 中楠 興編著 七二二〇円

近代私法学の形成と現代法理論「新装復刊」

原島重義編 七二二〇円

### ■流通経済大学出版社

■大阪大学出版会

フランス演劇から見た女性の世紀

近代日本における企業家の諸系譜

竹内常善・阿部武司・沢井 実編 六一八〇円

赤木富美子 六一八〇円

### ●製作の現場から 14 A

## そして読書は 祈りに還る？

▼「情報化社会の到来」と叫ばれて久しい。にもかかわらず、「情報」という言葉に、いまだになじめないでいる。僕にとつて、Informationという単語が意味するのは、せいぜいのところホテルのフロントの「ご案内」だ。これに対して「情報」からは、北米大陸のどこやらの国にある、五角形の建物の地下室あたりで扱われているものを連想する。推理小説、冒険小説の読みすぎだらうか。

▼セルスの電話が頻繁にかかってくる。「〇〇校」出身のお客様だけにお教える金融情報です」などと言う。こんなものを「情報」と言っただけはいい。ひと昔前の、押し売りの「折れ芯鉛筆」(若い人にはわかるまい)みたいなものだ。「情報」という言葉が、価値づけを

伴うものでないことは承知していても、やはり抵抗がある。

▼書物の行く末を考えると、も、「情報」という言葉が飛びかう。「電子メディアかペーパー・メディアか」の議論はいつとも、「単に情報としての書物であれば、検索や加工の容易な電子メディアの方がすぐれている。しかし、情報に「付加価値」を求める人は今後も存在するだろうし、両者がそれぞれの特徴を生かして併存して行くだろう」という結論に終わる。

▼気になるのは、この「付加価値」という言葉だ。書体やレイアウト、紙質やカバー・デザインは「付加」価値なのか。それは時として、「本質」でさえあるのではない。そもそも、印刷や製本の技術までを含めて、トータルな文化としての達成である書物を、「情報」という無機質な言葉でひと括りにしてしまつてよいものなのか。この問題を考える人に、E・イリイチ『テクストのぶどう畑で』(岡部佳世訳/法政大学出版社)の一読を薦めたい。【以下次号】

# 大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX 048-725-0324
慶應義塾大学出版会 <small>(旧慶應通信)</small>	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4238 FAX 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-368-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会 <small>(準会員)</small>	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会 <small>(準会員)</small>	〒565 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第29号) '96春 平成8年4月1日発行 発行所 大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954

頒布価格100円 千共